

# REXPRESS

REX-NET Newsletter Volume 1-4

## 国際教育シンポジウム大成功

去る 6 月 26 日 (土) 27 日 (日) 両日に渡り、東京府中市の東京外国語大学日本語教育センター、さくらホールにおいて REX-NET 設立記念国際教育シンポジウム「学校現場から国際教育活動を見直す～日本および海外双方の視点から～」が開催された。当初の予想をはるかに上回る参加者総数 100 名の有意義な大会となり、REX-NET として記念すべき大きな一歩を踏み出した。シンポジウムに先立って 2004 年度通常総会も現会員総数 83 名のところ総会参加会員 40 名委任状 28 名を持って開催され、今年度の活動計画や予算案などの承認を得、活動が円滑に動き始めた。



おしゃれな蝶ネクタイ姿で挨拶に立つ永井宏明代表理事

団体発足後、初の開催行事とあって、様々な不安はあったが、参加者は当初の予想を大きく上回り、計画以上の成果をあげることができた。以下、当日の展開に沿って評価する。

第 1 部「世界の教室で思ったこと、感じたこと、やったこと—そしてもちかえったもの」では、海外に派遣された経験をもつ教師が、海外でのさまざまな体験を語り、その経験をいかした多岐にわたる国際教育活動の実践報告を行ったことにより、国際教育の必要性が問われるなかで教師自らが海外のさまざまな教育環境・生活環境において教育者として経験を積むことの重要性やその経験を日本の学校現場にフィードバックすることの必要性を参加者間で確認できた。また、派遣された教員だけでなく、受入れた学校側から関係者を招き、派遣される側と受け入れ側の双方からの視点で報告がなされたことにより複眼的な内容となった。

第 2 部「知りたいこと、やりたいこと—そしてあなたにできること」では、コメンテーターによる第 1 部の総括および課題提起をふまえ、各テーマ別に、

### contents

国際教育シンポジウム報告	1～8
REX アンケート調査結果報告	9～10

教師や国際理解教育関係者、国際交流関係者など多岐にわたる分野の参加者間で議論を深めることができた。なかでも、「国際教育の授業実践」「国際教育の教材づくり」「外国語としての日本語を教えた経験をいかした言語教育」「海外の学校との交流」をあつかった分科会は好評であった。概念的・抽象的なテーマをあつかった分科会より、具体的な実践例をあつかった分科会が好まれたようである。一方、テーマの設定や、時間配分、第 1 部との関連性等、今後検討が必要な課題もある。

第 3 部「地域でできることを考えよう—REX-NET に期待されること」では、それぞれの地区で今後の活発な活動および各地区間の連携をどう促進していけばよいか議論が行われ、派遣者の意識傾向を認識した上で、地に足をつけた地元での活動へのアイデアが共有できた。

「REXPO：海外との交流プログラムの情報博覧会」では、交流プログラムを実施している団体と交流プログラムの情報を必要とする教師との情報交換の場を設定できた。また、交流活動を体験した日米の高校生による報告が行われたことより、教師や教育関係者だけでなく生徒の参加が実現し、好評を

得た。貴基金をはじめ多くの方々からの物心にわたる援助をうけることができ、無事成功裏にシンポジウムを開催することができた。今回のシンポジウムをとおして、REX-NETの趣旨を広く伝えるとともにネットワークを広げることができたほか、海外の初等中等教育段階での日本語教育と日本国内の外国語教育や国際教育との連携についても、今後より積極的に可能性を追求する突破口になったのではないかと考えている。

## 第1日目 6月26日(土)

12:00 開場

12:30 オープニング、グルーピング

13:00-15:15

### 第1部：世界の教室で思ったこと、感じたこと、やったこと—そしてもちかえったもの

#### ■海外教育体験と帰国後の教育実践報告

ぼくが横浜から行ったわけ 栗栖 裕 (横浜市立東高等学校・英語教育・米国派遣・10期) / George Dymond (米国ニューヨーク市・国連国際学校・副総長)

日本と韓国の教育現場で感じたことと学んだこと

服部 和之(島根県松江市立女子高等学校・国語教育・韓国派遣・10期) / 南 君鉉 (韓国慶尚北道亀尾市・慶北外国語高等学校・日本語教育)

メディアを使った英語教育実践

藤井 一憲 (山口県長門市立仙崎中学校・英語教育・豪州派遣・11期)

派遣を通してわかったこと・つかんだこと

—障害児教育にかかわって  
山口 美佐保 (広島県立盲学校・障害児教育・米国派遣・8期)

日本語を母語としない子どもたちへの

日本語教育  
矢崎 満夫 (東京都目黒区立東根小学校・日本語教育・国際交流基金豪州派遣)

中国語教育の取り組み

山田 秀二 (神奈川県立大師高等学校・中国語/国語教育・神奈川県中国派遣プログラム)

15:30-18:00

### 第2部：知りたいこと、やりたいこと—そしてあなたにできること

#### ■第1部実践報告のまとめ

◇各報告に対する質疑応答

◇グループディスカッションに向けての課題提起

吉田研作(上智大学外国語学部教授)

佐藤郡衛(東京学芸大学国際教育センター教授)

#### ■グループディスカッション

A: 国際教育の授業実践

B: 国際教育の教材づくり

C: 国際教育—個人の取り組みと学校全体の取り組み

D: 外国語としての日本語を教えた経験をいかした言語教育

E: 日本語を母語としない子どもたちへの日本語教育

F: 海外の学校との交流

G: 地域にねざした国際教育

\*\*\*\*\*

18:00-21:00

#### ■懇親会 (東京外国語大学 大学会館)

## 第2日目 6月27日(日)

9:00-11:30

### 第3部：地域でできることを考えよう—

#### REX-NETに期待されること

#### ■REX-NETアンケート調査結果報告

鈴木京子 (REX-NET調査担当・お茶の水女子大学大学院生)

#### ■地区別ディスカッション

#### ■全大会：各地区からの報告・まとめ

\*\*\*\*\* 閉会 \*\*\*\*\*

11:30-14:00 (参加自由)

#### REXPO：海外との交流プログラムの情報博覧会

#### ■交流相手のマッチング

#### ■交流実施団体のプログラム紹介

#### ■国連総会議場で開催された高校生国際会議

(2004年3月)参加した日米の高校生による体験発表  
国際教育シンポジウム：学校現場から国際教育活動

を見直す～日本および海外双方の視点から～

## 第1部：世界の教室で思ったこと、感じたこと、 やったことーそしてもちかえったもの

海外での教育体験とそれに基づく帰国後の教育実践の報告が行われた。アメリカ合衆国、韓国に関しては、派遣教員の報告のみならず、それぞれを受入れた学校側から関係者を招き、行く側とそれを受入れる側の双方の視点で報告がなされた。オーストラリアへの派遣教員からはメディアを活用した英語の教育実践例が、さらに米国派遣教員からは派遣体験を活かした帰国後の障害児教育への取り組みが報告された。また、REX派遣教員以外からも、日本語を母語としない子供たちへの日本語教育の実践例や、中国語教育の取り組みなどが提示された。各発表の概要は以下のとおり（発表資料については、別添資料4「会議資料」を参照）。

## 第2部 知りたいこと、やりたいこと ーそしてあなたにできること

東京学芸大学国際教育センター教授佐藤郡衛氏、上智大学外国語学部教授吉田研作氏より第1部の実践報告の総括と課題提起がなされたあと、テーマごとにグループに分かれディスカッションを行った。各グループの討議内容は以下の通り。

### A：国際教育の授業実践

まず、新潟県高田北城高等学校教諭渡辺政寿氏（REX10期・ロシア派遣）より実践報告があった。日本の所属高校より年賀状を送り、ウラジオストックの派遣校よりクリスマスカードを送るという交流活動である。その後、第1部でメディアを使った実践報告を行った藤井氏も交え、渡辺・藤井両氏への質疑応答という形式で議論が進んだ。藤井氏は、ネットワークを通じて意欲ある相手を見つけることの大切さを強調した。渡辺氏も、そのためにこそ、このREX-NETが重要であり、組織的な情報網の整備が必須であると語っ

た。次に、今夏REXで派遣される15期の教員へのアドバイスをを行った。さらに、参加者より、総合的な学習の時間や国際理解の時間に講師を派遣する商社員OBたちの組織について紹介があった。

### B：国際教育の教材づくり

参加者の中で具体的に教材作成を実践している教員を中心に意見交換が進められた。具体的にはアメリカで行われている方法として、ラップにのせて文法や単語を教える例などの紹介があった。生徒によって目で見て学習するのが好きな生徒、体を動かしながら学習すると覚えやすい生徒など様々なので、一つの方法にこだわらず、生徒に合わせてベストなものを考えていくことが必要であるという意見もあった。

### C：国際教育

#### ー個人の取り組みと学校全体の取り組み

本分科会が、国際教育において具体的に、4つの高等学校の事例が紹介された。①立ち上げの経過、②継続の状況とその妨げになる要因、③活動の広がり、④国際教育の成果という4点をふまえたうえで発表が行われた。

学科新設後1年が経過した公立A校では、「地球上のどこへ行っても他者の幸せを考えながら生きていける人間の育成」を教育目標に掲げ、教科間の強い連携を軸に全学科でその達成に力を合わせている。開設当初から、海外の学校との交流を行っているほか、学校立地の利を活かし、国際的諸機関との連携で教育活動を展開している。

学科転換後6年目の公立B校では、全学科で国際教育をどう進めていくかが大きな課題の一つとなっている。他校の指標となる学校づくりを目指し、2年次で4つの外国語の中から選択して受講できるようにしているほか、国際教養、外国事情、異文化理解といった科目を設置している。

創立8年になる公立C校では、「国際化、情報化などの社会の発展に対応・貢献する人材を育成するために複合的な教育を行う」を教育目標に掲

げ、国際文化科を設置、SELHiにも指定され意欲的な英語教育を行っているほか、異文化理解、英語表現、比較文化、日本文化、地域の自然、国際ボランティア基礎等の科目を設置している。

創立10年の私立D校では、「全地球的な観点で問題意識を持ち、様々な問題解決に向けて自らを高める自己啓発力を育てる」を教育目標に掲げ、中高一貫教育を行っている。2年間で9カ国のことを学び、1週間の海外研修旅行も行っている。総合的な学習は「地球市民」というテーマで行われているほか、課題研究や多彩な講演会（土曜講座、医歯薬講座など）を開催している。

#### D：外国語としての日本語を教えた経験を

##### いかした言語教育

吉田研作氏と佐藤郡衛氏の課題提起を受け、Dグループでは、「実践的コミュニケーション能力を図ることのために、帰国後どのようにその経験を英語教育にいかしていったらよいのか」という視点からディスカッションを行った。

まず、「海外での日本語教育を経験して、それまで英語を教える際に、机上の『知識』のみを教えていたことに気がついた」という意見、さらに「海外では"Student-Centered"の考え方が根付いていることを強く感じ、子供をどう活動させるかという視点でものを考えるようになった」という「気づき」の声が聞かれた。しかし一方、「帰国後、現地で気づいた、あるいは考えたことを日本の教育現場で実践しようとする、受験英語、管理職の姿勢、旧来のやり方でよしとして譲らぬ教員等、様々な障壁が立ちはだかっている」という現実もまた課題提起された。「日本語を教授する際、ある一つの表現に対して、どのくらいの表現の幅が許されるべきか」という話題で最も議論が白熱したが、最終的には、「教授者が生徒の理解度を丁寧に観察しつつ、ある程度コントロールしながら様々な日本語を許容して教えるのはいいか」という意見がでた。

#### E：日本語を母語としない子供達への日本語教育

外国人枠を設定している大阪府立K高校の報告が行われた。K高校は普通科総合選択制の学校で外国人入試枠を定員(240名)の5%(12名)確保し、現在4期目である。第一回目の進学状況や日本語学習、母語学習の現状や生活全般を含めた文化交流事業が報告された。現在の課題としては日本語教育にあまり予算を割けないこと。そこで、今後REX-NETがこういった現状に関して何か提言をしていけるとよいのではないかとの意見が出された。

#### F：海外の学校との交流

まず、分科会の参加者勤務校の様子を報告し合い、海外の学校との交流の中で起こる実際の問題点について話し合った。主なものとして、金銭的な問題、単発で終わってしまいがち、学校全体で取り組むという雰囲気につくれない、一部の交流で終わってしまう、などの意見があった。

金銭面に関しては地方公共団体からある程度引率教員に補助が出るところや、学校の同窓会が学校全体の発展に向けて補助を出すところもある。地元企業への働きかけをしている学校や、学園祭などで募金活動を行い、生徒から集めた募金によって補助金を捻出しているケースもあった。

海外交流プログラムとして、行く生徒だけでなく行かない生徒も巻き込んでいたり、交流している時期だけでなくそれ以外の時期にも盛り上げていたりするような努力が必要であり、教員同士の「人」対「人」の交流を通して、土台づくりについてざくばらんに話しあえるような状況が必要である。また、今後はREX-NETが交流崎の紹介や交流にあたってのアドバイスを行えるようになればよいという声があった。

#### G：地域にねざした国際教育

国際教育の現状と問題点ということで、東京のある都立高等学校における多文化共生に関するさまざまな取り組みについて報告が行われた。

定時制において、日本語を母語としない生徒とうまく付き合えない日本の生徒が多くいるとい

う問題があった。大田区内で「多文化共生」を目指して活動を行っている OCNet とタイアップして国際教育に取り組むことになり、この実践に関しては、職員間に、会議の時間設定、進め方、学校と民間の文化の違いに対する危惧もあったが、高校側と OCNet が対等の立場で進めていくことができた。学校から外部に活動を展開することによって、地域全体の教育力が上がる。今回の実践例はかなり具体的、現実的で学校だけではできなかったことが、他と連携することによって実現可能になることがわかった。そういった意味で REX-NET が大いに期待されるのであろう。

### 第3部 地域でできることを考えよう

#### － REX-NET に期待されること

2003年11月中旬から2004年3月末にかけて、REX プログラム派遣者 265 名を対象に REX-NET が実施したアンケート（回収率 68%、詳細は別添資料 4「会議資料」を参照）の調査結果報告をふまえ、地区別に 9 ブロックに分かれて、各地区で今後の活動および各地区間の連携をどのように促進していけばいいか議論を行った。各地区での議論の内容は以下のとおり。

#### 北海道ブロック

今後は REX 教員の中だけの活動ではなく、なるべく外に出て REX-NET を認知してもらう必要がある。国際教育活動への具体的な取り組みがない学校にいる REX 教員は、目の前にいる生徒に対する成果をきちんと他の教員にも見せられる「先駆の変人」になることも必要。

国際教育活動としてベトナムやカンボジアに生徒を派遣している派遣者からは「関心をもたれないことも必要」という逆の視点からの意見も出た。ベトナム・カンボジアというと戦争があって地雷がまだ埋まっているという考えで大人は取り組むが、子供は大人が考えもしない観点で活動に取り組むこともあり、新しい考え方が生まれる場合もあって興味深い。

#### 東北ブロック

東北は今回の参加者が 3 名と少なかった。参加者はみな国際教育に関わっている教員で、それぞれの学校での生徒派遣や受け入れに関して悩みをもっているという状況である。

今後 REX としてまず仲間を増やすことが最優先課題であろう。

ネットワークづくりのために REX 帰国教員を中心とした名簿の作成やホームページを使った情報の公開など長期的な視点を持って取り組むべきである。

#### 関東ブロック 1（神奈川県）

地域や全国規模で、他の国際教育団体とも協力して、より多くの人を巻き込んだ形で活動を展開していく。またそれらを生かした魅力的な研修を企画運営していく。

生徒を巻き込みながら、生徒を派遣したり受け入れたりしている団体、各国の文化や料理などを紹介するイベントを企画運営している団体と協力した活動を考えていく。横浜には国際教育活動団体を紹介した「横浜理解教育総合便利帳」があるので、それらの資料を活用して研修の企画などを手がけていきたい。

これらのイベントへの参加を容易にするサポート体制の整備も必要。文部科学省や各自治体の教育委員会などに後援などを呼びかけて教員が参加しやすい体制をつくる。

今回のような全国大会も大事だが、小さい地域に分けて参加しやすい形での研修会や、地域にふさわしいワークショップの企画も考えていくべき。

#### 関東ブロック 2

長野からの派遣が 13 期で打ち切りになってしまったというような共有できる情報は REX-NET の中で情報交換できるようにしたい。

最近は WEB によるネットワークづくりが容易な環境にはなっているが、今回このように参加者

がひとつの場所に集まり、実際に顔を合わせたという意義は大きい。その場で顔を合わせているからこそできる話し合いもあるので、各地域でもオフミーティングや同窓会のようなものでもかまわないので、研修などもそのような小さな集まりからスタートさせていってもよいだろう。

ファンドレイジングにも関わってくることだが、REX 教員だからこそ発信できるような現職の教員による海外体験を WEB の中で原稿として集め、それをまとめて出版することで一般市民への啓蒙活動を行ったり、企業の補助金を得て出版資金に当てることも可能なのではないか。

#### 北陸・中部ブロック

岐阜県と新潟県の教員のみでの参加であった。岐阜県では REX の OB 会がすでにあり、派遣者に対してアドバイスなどを伝える会が 7 月に開かれている。また学校人事課に配属されたりするなどして、REX 帰国教員が REX プログラムの面倒を見るような体制にはなっている。新潟県ではウラジオストックへの派遣が打ち切られてしまい、つながりが立ち消えそうな状況になっているが、今回の NPO 発足を受けて、帰国した派遣教員を集めて話し合う場を持ち、今後の活動への足がかりを作った。財政上の問題から、県自体の国際交流が打ち切られ、国際教育への取り組みが縮小されている中で、REX の知名度を外に向けて発信していくことが必要である。

#### 関西ブロック

関西地区は交通の便がいいので府県を越えての交流をはかり、いろいろな活動をしていくことになった。REX 教員は研修で日本語の教授法を学び、実際に教えた経験も持っているため、JET の教員に日本語を教えるような場を提供していきたい。REX の体験を積むと日本で生活する JET の教員の立場も気持ちもよりよく理解できるので、相談に乗ったりして、日本での適応をサポートしていきたい。国際交流に関して各校がさまざまな活動をしているが、国際交流委員になってい

るメンバーが、それぞれ自分ひとりで背負っているのが現状である。そのような体制があると助かる。もっと研修会を企画していく必要がある。会合を重ねて、REX の存在をアピールすることが必要。

#### 中国・四国ブロック

各県でかなり違いがあり、岡山県の場合は帰国後 ALT の中期の研修会でのレクチャーを任されている。まずは、各県で集まる機会を設けて、プランを持ちよることになった。また、地理的利便性を鑑み、広島県に中国・四国ブロックの事務局を置き、活発な情報交換をするために、メーリングリストを活用する。今後は、行政への働きかけ、他の団体との協力のほか REX の独自性を打ち出すことが必要である。これから派遣される教員とのつながりがあることが一番の独自性である。活動資金については、REX-NET 本体からの活動補助金だけに頼らず、企業・団体への寄付や広告の呼びかけ、会場借料費の減額要求など、中国・四国内で必要な資金を獲得するよう努力する必要がある。

#### 九州・沖縄ブロック

福岡県では毎年、福岡県の REX 帰国教員が次期派遣者を囲んだ壮行会を開催している。その会を REX に関する情報交換会として活用する。九州では福岡・北九州・鹿児島の 3 地域で REX 派遣が行われている。そこで今回、北九州市の小・中・高の全教員名簿から勤務先をたどり REX 教員の名簿を作成した。今後は、イベントや研修会の情報交換を行う。この場でも、熊本で 8 月に行われる国際理解教育の研修会について情報交換が行われた。その他の既存の研修会も数多くあり、その中には 30 年～40 年続いているものもある。

REX のネットワークを広げて REX 教員以外にも情報を発信できるようにしていきたい。

#### 海外ブロック

海外からの参加者 4 名がおり、8 月より海外に派遣される REX15 期の教員が中国、カナダ、アメリカの教師からそれぞれの観点でアドバイスを受けた。

#### REXPO : 海外との交流プログラムの情報博覧会

日本と海外との交流プログラムを実施している団体 13 団体が資料等を展示し、国際教育の取り組みを模索している教員との情報交換を行ったほか、REX13 期派遣教員による展示や発表が行われた。2004 年 3 月に国連総会議場で開催された UNIS-UN (国連国際学校—国連会議) 報告では、UNIS-UN を主催した生徒・教師とそれに参加した生徒・教師が開催にいたるまでの取り組みや体験などについて語り、生徒・教師双方の立場から、このような国際会議に参加することの教育的効果の高さと意義が提示された。また、国際会議に参加するためのプレゼンテーションやライティングの訓練のためのコース設定なども紹介されたが、会場参加者は、日本人の生徒が普通の学生がどのような変化をとげて国際会議に積極的に参加するようになったのか、そのプロセスに強い関心を示していた。

REXPO の出展団体および発表者は以下の通り。

#### □ブース出展団体 (五十音順)

エイ・エフ・エス日本協会、グローバル化社会の教育研究会(EGS)、国際交流基金国際文化交流推進協会、ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センター、全国語学教育学会(JALT)、日本国際生活体験協会(EIL)、日中児童の友好交流後援会。米国理解研究会、母語・継承語・バイリンガル教育研究会、凡人社、横浜市国際交流協会 (YOKE)、WYS 教育交流協会日本事務局

#### □REX13 期派遣教員による展示

REX13 期派遣有志

#### □REX13 期派遣教員によるビデオ上映

森山貴美 (北海道真狩中学校/カナダ・アルバータ州派遣)

#### □国連世界高校生会議 (UNIS-UN) 発表

佐々木健太郎 (横浜市立東高等学校)

辻本真由美 (UINS)

白冰 (横浜市立横浜商業高等学校)

来海知勝 (山手学院中学校・高等学校校長)

齋藤由美 (羽黒学園羽黒高等学校教諭)

津田和男 (UNIS 教諭)

### 3. シンポジウムの成果と課題

#### (1) シンポジウム開催の意義

本年 4 月に NPO 法人として正式に発足した REX-NET にとって、本シンポジウムは初めての事業であり、かつ開催時期までの準備期間が短かったこともあって、主催者として開催までさまざまな不安があった。しかし、国際交流基金や国際文化フォーラム、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センターをはじめ多くの団体、関係者からの物心にわたる援助をうけることができた。無事成功裏にシンポジウムを開催することができた。参加者も当初の予想を大きく上回り、REX-NET の趣旨を広く伝えるとともにネットワークを広げることができた。シンポジウムの内容としても、学校教育現場にいる教師の視点から国際教育についてそれぞれが発表し、また具体的な活動に向けて、多岐にわたる分野の方々と議論を深めることができたことは意義深いことだった。本シンポジウム発表者のユニークな点は、それぞれが海外各国の学校現場で日本語教師としての教育体験をもち、その教育的、文化的体験をふまえて、現在日本の小中高校で現職教師として教育活動に携わっていることであった。発表のなかでも、海外各国の教育の様子が経験談を交えて伝えられ、世界的な視野のなかで国際教育について考えることができた。国際教育の必要性が問われている昨今、教師自らが海外のさまざまな教育環境・生活環境に身をおいて教育者として経験を積むことの重要性や、その経験を日本の学校現場にフィードバックすることの必要性を参加者とともに確認できた。と同時に、海外の初等中等教育段階での日本語教育と日本国内の外国語教育や国際教育との連携についても、今後より積極的に可能性を追求する突破口になったのではないかと考えている。

## (2) シンポジウム各部の内容評価

第1部については、事前に主催者と発表者間で討議を重ねたこともあり、充実した内容の発表が行われた。また、ビデオやパワーポイントなどの利用により、視覚的にも工夫されたプレゼンテーションが行われた。海外に派遣された日本人教師の実践報告だけでなく、派遣を受け入れた側からその意義や課題などについて報告が行われたことで複眼的な内容となった。

第2部については、とくに「国際教育の授業実践」「国際教育の教材づくり」「外国語としての日本語を教えた経験をいかした言語教育」「海外の学校との交流」をテーマとする分科会が好評であった。概念的・抽象的な話題を扱った分科会よりも、具体的な実践例を扱った分科会が好まれた。

第3部では、過去に派遣されたREX教員を対象としたアンケート調査結果の分析をうけて、8つの地域に分かれ、それぞれの地区での今後の活動および各地区間の連携をどう促進していったらよいか議論を行った。派遣者の意識傾向を認識した上で、地に足をつけた地元での活動へのアイデアが共有できた。

シンポジウム終了後に行われた「REXPO：海外との交流プログラムの情報博覧会」では、交流プログラムを実施している団体13団体による展示が行われたほか、交流プログラムを体験した日米の高校生によるプレゼンテーションが行われ、教師や教育関係者だけでなく、生徒の参加も実現できた。

## (3) 今後の課題

REX-NETとして、今後の組織固めと着実な事業を遂行していきたい。今回のシンポジウムで行ったグループディスカッションが重要な課題を提起していると考えられる。一つは、守備範囲の広い国際教育活動のなかで、今後具体的に何に焦点をあてて活動を行っていきたいかについて、事業計画を明確にしていくことである。二つめは全国に広がる会員間のネットワークの芽を育て、全国組織および各地域の組織づくりを進めていくことである。それらの目的を達成するために、本シンポジウムの一環として、年度内に地域別のフォローアップ会合を開催することを計画している。また本シンポジウムで中間発表をしたREX帰国教員対象のアンケート調査の報告を含むシンポジウムの最終報告書も発行する予定である。REX-NETの理事、事務局および各地区代表間で密に連携をとりながらネットワークの活性化に努め、国内外の国際教育に資する活動を行ってきたい。

## REXプログラム評価に関する調査プロジェクト 報告書

### 1. 調査の概要

本調査は、2004年度4月のNPO法人REX-NETの立ち上げに際し、NPOとしての今後の活動指針を与える道しるべとなる基礎的データを得るために組織された。本調査では、派遣から帰国後までREX教員達が現地校での日本語教育実践からどのようなインパクトを受け変容を遂げたのか、その変容が帰国後日本の教育現場でどのような還元を導いているのか、また還元にはどのような問題があるのかを明らかにするために、質問紙調査項目および自由記述により回答を依頼した。調査用紙は2003年11月中旬に東京外国語大学留学生センターの協力を得て、第1期から第12期までのREX帰国教員244名に郵送された。その後、2004年1月に国際文化フォーラムの協力を得て、記名付きの回収済み調査用紙を除き、未回収の調査表の督促をe-mailにて行った。3月には再度ファックスおよび電話での督促を行った。また3月には第13期のREX教員の多くが帰国したので、e-mailにて調査用紙を送付した。その結果、合計265名のREX帰国教員のうち、3月末に167名から調査票を回収することができた。回収率は67%であった。ここに調査票の送付、督促、回収を可能にいただいた東京外国語大学留学生センター、国際文化フォーラム、並びに調査票に記入、送付に協力していただいたREX帰国教員の先生方に感謝の意を表したい。ここでは紙面の制約のため、主要な結果のみを抜粋して報告する。詳細は後日発行する調査報告書を参照されたい。

### 2. 回答者に関して

(1) 回答者166名の派遣国は、アメリカ合衆国70名、オーストラリア49名、ニュージーランド8名、中国8名、韓国5名、ロシア5名、フランス4名、イギリス14名、カナダ9名、パラオ1名だった。

(2) 回答者163名の派遣国の生徒の学習段階は、初級54名、中級3名、上級1名、初級と中級59名、中級と上級7名、初級と上級1名、初級・中級・上級38名だった。

(3) 回答者165名は、単独授業90名、チームティーチング30名、両方45名だった。

(4) 回答者165名の派遣時の年齢は、25歳から42歳までで平均年齢は32歳だった。

(5) 回答者165名の派遣国勤務校の学校段階は、小学校12名、中等学校103名、大学5名、その他2名、小学校と中等学校兼務32名、中等学校と大学兼務1名、中等学校とその他兼務2名、小学校・中等学校・その他兼務8名だった。

(6) 回答者166名の性別は、男性107名、女性



59名だった。

(7) 回答者 162名の年齢は、29歳から51歳までで平均年齢は39歳だった。

(8) 回答者 165名の勤務校は小学校5名、中学校47名、高等学校94名、それ以外6名、離職12名、中等学校1名だった。

(9) 回答者 157名の教職科目は、英語123名、国語10名、社会科4名、理科1名、数学1名、小学校全教科5名、複数科目3名、日本語教育1名、音楽1名、美術1名、その他1名であった。

(10) 回答者 163名の教職年数は7年から27年で、平均教職年数は16年だった。

### 3. アンケート調査の集計結果

アンケートのQ1からQ14において4段階で尋ねた質問は、集計に当たって、1:全く当てはまらない、2:あまり当てはまらない、を1:該当しない、に、また3:やや当てはまる、4:とても当てはまるは、2:該当する、の2段階に変換して計算した。

#### (1) 応募動機

Q1の応募動機に関して各項目の該当者は、他者からの推薦という外的要因である「教育委員会からの推薦」51名、「管理職の推薦」70名、「同僚教員の推薦」10名、「先輩教員からの推薦」25名だった。内的要因としては、「教員として海外体験が必要であると感じる」136名、「海外の学校とのパイプ作り」49名、「日本語教育を体験したい」33名、「語学力の向上希望」136名、「教員としての幅を広げたい」159名、「新しいことへの挑戦がしたい」154名、「異文化体験をしてみたい」158名、「海外居住を希望」148名であった。

#### (2) 派遣前と派遣中の言語運用能力

Q2で尋ねた派遣前の言語運用能力に関する自己評価の総得点から、Q8で尋ねた派遣中に達した言語運用能力に関する自己評価の総得点を差し引いた得点数は、-5ポイント:1名、-4ポイント:2名、-3ポイント:2名、-2ポイント:1名、-1ポイント:5名、0ポイント:34名、1ポイント:39名、2ポイント:24名、3ポイント:23名、4ポイント:15名、5ポイント:8名、6ポイント:2名、7ポイント:3名、8ポイント:4名、9ポイント:2名だった。派遣中に言語能力の伸張を遂げたと評価するものは全体の72%だった。しかし言語能力が伸張しなかったと評価するものが20.5%、退行したと評価するものが6%強いた。

#### (3) 派遣中の気づき

Q5で尋ねた派遣中の学校教育実践において、REX派遣教員達が気づいた違いを、気づきの割合が高い

順番に並べてカッコ内の人数と共に示す。(1)学校行事(152)、(2)設備環境(145)、(3)生徒と教師の関係(144)、(4)カリキュラム(142)、(5)クラブ活動(141)、(6)教材(137)、(7)教授法(137)、(8)授業形態(137)、(9)学級運営(136)、(10)教師の専門性(135)、(11)試験(135)、(12)生徒の学力評価(135)、(13)保護者と教員の関係(134)、(14)校則(132)、(15)シラバス(127)、(16)進路指導(122)、(17)地域と学校の関係(121)、(18)管理職と教員の関係(120)、(19)危機管理(119)、(20)生徒会(115)、(21)教師間の関係(107)、(22)教員研修(104)だった。いずれの項目も、6割以上の教員が違うと感じていた。日本で慣れ親しんでいた教育実践と異なるやり方があることに気づくこと自体が、教員の視野を広げたことになる。

#### (4) 帰国後の違和感

Q12の1) 帰国後周囲の教員の教育実践に対して持った違和感を、違和感を持った割合の高い順番に並べてカッコ内の人数と共に示すと、(1)授業形態(125)、(2)教授法(120)、(3)クラブ活動(115)、(4)教材(114)、(5)カリキュラム(106)、(6)校則(110)、(7)学級運営(110)、(8)設備環境(105)、(9)生徒と教師の関係(105)、(10)教師の専門性(104)、(11)学校行事(104)、(12)生徒の学力評価(104)、(13)教員研修(95)、(14)試験(92)、(15)進路指導(92)、(16)管理職と教員の関係(90)、(17)学習指導要領(89)、(18)地域と学校の関係(89)、(19)危機管理(89)、(20)保護者と教員の関係(86)、(21)教師間の関係(80)、(22)生徒会(76)だった。

このように多くのREX教員が帰国後何らかの違和感をもった。もともと慣れ親しんでいたはずの日本の学校教育現場に戻り、その中で授業形態や教授法、教材、カリキュラムなど、教科教育の中心ともなるべき教科専門分野に違和感を持ったことが特徴的である。それ以外には、クラブ活動、校則、学校行事などの指導に関する部分で派遣中の気づきよりも帰国後の違和感の方が高い割合で感じられていた。これらは派遣中に無意識に取り込まれて、帰国後に他の教員の実践と照らし合わせた時に明確に気づかれた帰国教員の中の変化であると考えられる。また生徒と教師との関係にもたれた違和感も高かった。

#### (5) 帰国後の改善意識

Q10の2)で尋ねた帰国後に教育実践に対して改善意識をもった点を、改善意識の割合の高い順番に並べてカッコ内の人数と共に示す。(1)授業形態(100)、(2)生徒と教師の関係(98)、(3)教授法(92)、(4)教師の専門性(87)、(5)クラブ活動(83)、(6)教材(78)、(7)学級運営(72)、(8)校則(73)、(9)設備環境(69)、(10)危機管理(68)、(11)生徒の学力評価(68)、(12)教員研修(66)、(13)カリキュラム(64)、(14)学校行事(57)、(15)進路指導(52)、(16)保護者と

教員の関係 (51)、(17)学習指導要領 (49)、(18)試験(49)、(19)地域と学校の関係 (49)、(20)管理職と教員の関係 (45)、(21)教師間の関係 (40)、(22)生徒会 (36) だった。

生徒と教員との人間関係を変革する必要性が高く感じられていた。自由記述では、日本における教員と生徒の人間関係は、多くの教員によって日本の教育の良い点だと指摘されている。しかし良いと評価されている点が改善点でも上位にあげられたのは、良い点は往々にして諸刃の刃になる可能性があることを示唆しているからであろう。すなわち生徒と教員の親子のような関係は、度を超すと教員が生徒関係に尽くして疲弊してしまう可能性も秘めている。授業形態や教授法、教師の専門家性などの専門教科の領域に対する改善意識も高い。回答者の74%の教員は英語科教員だったが、特に英語科の授業形態、教授法が、派遣国での日本語教育から省察されている。またクラブ活動や校則などの指導に関する部分での改善意識が4割を超える教員に分からもたれた点も注目に値する。

#### (6) 帰国後の還元達成

Q14で尋ねた帰国後に達成したREX体験で得た知識並びに広めた視野を、日本の教育現場のどのような還元した点に関して、達成感の高い順番に並べ、カッコ内の人数と共に示す。(1)教職専門性改善(146)、(2)教育方法改善(136)、(3)授業方法改善(133)、(4)教材開発(130)、(5)積極的研修参加(103)、(6)教職教科拡大(106)、(7)生徒教師関係改善(96)、(8)試験改善(95)、(9)公発表(90)、(10)交流事業(83)、(11)カリキュラム改善(76)、(12)教師関係改善(70)、(13)日本語教育従事(56)、(14)生活指導改善(43)、(15)地域連携改善(40)、(16)管理職教員関係改善(45)、(17)教育委員会従事(39)、(18)高度英語教育従事(18)、(19)進路指導改善(31)、(20)危機管理改善(28)、(21)クラブ活動改善(19)だった。教職専門性の改善達成は、88.0%の教員が達成したと報告している。教育方法、授業改善、教材開発もほぼ80%が達成した。さらに教職の教科拡大、積極的な研修参加、試験の改善が多くの教員に達成できたと感じられている。これらはREX帰国教員が、個人として達成できる点である。教員集団の協力が必要なカリキュラムの改善、教師間の関係改善、生活指導改善などは達成の比率が低い。1つの学校にほぼ一人しかREX派遣体験者がいない現状では、体験の還元が教員個人の力だけに依存する。このような点は、REX-NETの協力を必要とする点であろう。

#### (7) 帰国後の教育現場への還元を阻む要因

自由記述によるREX派遣体験の教育現場への還元を阻む要因に関しては、大きく①自己の外側にある原因、②自己に起因する原因に分けられた。自己の

外側の原因としては、学校に協力者がいない(26)、学校という場の問題(例えば学校の保守性、閉鎖性、システム上の問題、柔軟性のなさ、変化に対応する能力のなさ、職員会議で意見が言えない雰囲気、生徒指導・部活動・学校の運営方法、大規模校の保守性、足並みそろえる学校体制、新しい考えを取り入れる雰囲気がない、変革を嫌う現場等、(24))、教員・管理職・行政のREX理解不足(22)、大学入試に焦点かした学力重視の教育(20)、教育現場の多忙さ(19)、帰国後のREX教員の配置問題(18)、教員の問題(前向きに考えない等、(17))、学級サイズ(8)、授業上の問題(6)、管理職の問題(6)、社会の問題(5)、制度上の問題(4)、生徒の問題(4)、予算の問題(3)、急激な日本の教育現場の変化(3)、規則の問題(2)が挙げられた。自己に起因する要因としては、余裕がない(6)、やる気がない(3)、周囲への遠慮(1)、還元の方法が分からない(1)、自己の還元自信がない(1)、体験をそのまま当てはめようとした(1)が挙げられた。

#### 4. 今後の課題

日本語教育の専門家となるべく3ヶ月の事前研修を受け、海外の現地校で日本語教育に携わった派遣教員達のわずかに3割ほどが、帰国後日本語教育に携わっているという結果が明らかになった。自由記述から、学校教育の中で、外国籍児童に日本語教育の専門家として日本語教育を行っているものが1名、地域の外国人に日本語を教えているものが1名いることが明らかになった。それ以外の多くの場合は、他教科の専門家ではあるが、赴任校にいる外国からの留学生や帰国生に、空き時間を利用して日本語教育を行っている例が見られた。今後REX帰国教師が日本語教育の専門家として活躍できる場が望まれる。専門教科の改善には、個人の努力も重要であるが、共同でのカリキュラム開発や、交流事業をよりよくするための提言、アイデア交換など、今後REX-NETで組織化できることは多いと考えられる。地域との連携をはかれるようなプログラムの開発も、共同で行うための意見交換もREX-NETに期待される。最後に学校内部の教員集団への働きかけをより強固なものにするためには個人の教員の力だけではなく、REX教員数名が配置されることが望ましい。またREX派遣教員の人数を増加させ、海外での教育体験をふまえて提言できる教員の増加をはかることも重要であることが本調査で明らかになった。